詩想

国木田独歩

丘の白雲

大空に漂う白雲（しらくも）の一つあり。童（わらべ）、丘にのぼり松の小かげに横たわりて、ひたすらこれをながめいたりしが、そのまま寝入りぬ。夢は楽しかりき。雲、童をのせて限りなき蒼空（あおぞら）をかなたこなたに漂う意（こころ）ののどけさ、童はしみじみうれしく思いぬ。童はいつしか地の上のことを忘れはてたり。めさめし時は秋の日西に傾きて丘の紅葉（もみじば）火のごとくかがやき、松の梢（こずえ）を吹くともなく吹く風の調（しら）べは遠き島根に寄せては返す波の音にも似たり。その静けさ。童は再び夢心地（ゆめごこち）せり。童は

いつしか雲のことを忘れはてたり。この後、童も憂(う)き事しげき世の人となりつ、さまざまのこと彼を悩ましける。そのおりおり憶(おも)い起こして涙催すはかの丘の白雲、かの秋の日の丘なりき。

二人の旅客

雪深き深山(みやま)の人気(ひとけ)とだえし路(みち)を旅客(たびびと)一人(ひとり)ゆきぬ。雪(ゆき)いよいよ深く、路ますます危うく、寒気堪(た)え難くなりてついに倒れぬ。その時、また一人の旅人来たりあわし、このさまを見て驚き、たすけ起こして薬などあた

えしかば、先の旅客（たびびと）、この恩いずれの時かむくゆべき、身を終わるまで忘れじといいて情け深き人の手を執りぬ。後（のち）の旅人は微笑（ほほえ）みて何事もいわざりき。家に帰らば世の人々にも告げて、君が情け深き挙動（ふるまい）言い広め、文（ふみ）にも書きとめて後の世の人にも君が名歌わさばやと先の旅客（たびびと）言いたしぬ。情け深き人は微笑（ほほえ）みて何事もいわざりき。かくてこの二人（ふたり）は連れだちて途（みち）をいそぎぬ。路はいよいよ危うく雪はますます深し。一人つまずきぬ。一人あなやと叫びてその手を執りぬ。二人は底知れぬ谷に墜（お）ち失（う）せたり。千秋万古（せんしゅうばんこ）、ついにこの二人がゆくえを知るものなく、まして一人の旅客（たびびと）が情けの光

をや。

膄土(しゅうど)

美(うる)わしき菫(すみれ)の種と、やさしき野菊の種と、この二つの一つを石多く水少なく風勁(つよ)く土焦げたる地にまき、その一つを春風ふき霞(かすみ)たなびき若水(わかみず)流れ鳥啼(な)き蒼空(あおぞら)のはて地に垂(た)るる野にまきぬ。一つは枯れて土となり、一つは若葉萌(も)え花咲きて、百年(ももとせ)たたぬ間に野は菫の野となりぬ。この比喩(ひゆ)を教えて国民の心の寛(ひろ)からんことを祈りし聖者(ひじり)おわしける。されどその民の土やせて石

多く風勁（つよ）く水少なかりしかば、聖者（ひじり）がまきしこの言葉（ことのは）も生育（そだつ）に由なく、花も咲かず実も結び得で枯れうせたり。しかしてその国は荒野（あれの）と変わりつ。

路傍の梅

少女（おとめ）あり、友が宅にて梅の実をたべしにあまりにうまかりしかば、そのたねを持ち帰り、わが家（や）の垣根（かきね）に埋めおきたり。少女（おとめ）は旅人が立ち寄る小さき茶屋の娘なりき、年経てその家倒れ、家ありし辺（あた）りは草深き野と変わりぬ。されど路傍なる梅の老木（おいき）のみはますます

栄えて年々、花咲き、うまき実を結べば、道ゆく旅客（たびびと）らはちぎりて食い、その渇（かわ）きし喉（のんど）をうるおしけり。されどたれありて、この梅をここにまきし少女（おとめ）のこの世にありしや否やを知らず。

（明治三十一年四月作）

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店
　　１９３９（昭和14）年２月15日第１刷発行
　　１９７２（昭和47）年８月16日第37刷改版発行
　　　２００２（平成14）年４月５日第77刷発行
底本の親本：「武蔵野」民友社
　　１９０１（明治34）年３月
初出：「家庭雑誌」
　　１８９８（明治31）年４月
入力：土屋隆
校正：蒋龍
２００９年３月28日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。